中國詩文論叢　第十五集

白居易と家屋表現（上）

――身體と居住空閒を繫ぐもの――

埋田重夫

〔一〕

李白の沒後十年、杜甫の死後二年に、北中國の鄭州新鄭縣に一人の詩人が生まれた。後に唐代隨一の作品量を誇り、廣範な讀者層――享受層――を獲得することになる白居易である。彼の作風は、江州左遷以前の〝諷諭〟〝兼濟〟とそれ以後の〝閑適〟〝獨善〟に大別されるが、首尾一貫した特色は「平易暢達」であり、作品の量・質ともに、中唐詩壇最大の詩人に位置づけられる。

本稿では、彼の自撰集である『白氏文集』七十一卷（うち四卷は缺）を對象にして、そこに現れる多數の居住空閒について、系統的な考察を試みたいと思う。白居易は、自らの家屋に對して、特別の關心を抱き續けた詩人である。その愛着の強さは、漢魏六朝から隋唐五代までの詩人群にあって、ひときわ傑出している。白詩における家屋表現は、樣式區分（古體・近體）や內容分類（諷諭・閑適・感傷）に關係なく頻出し、その大部分は、白居易の身心狀況と密接に絡みあって詠われる。白居易という詩人にとって、身體と居住空閒を繫ぐものはいったい何であったのか、その解明はおそらく、彼の閑適文學の構造を考えるうえで、必須の作業であろう。

最晚年、洛陽の履道里宅で本格的に展開される閑適世界は、長い時閒をかけた準備と周到に練られた計畫のもとに、六十代になってようやく完成したものであった。彼は七十五年の人生で、度重なる轉居を經驗している。今回は、數十年に及ぶ閑適實現の軌跡を、家屋描寫の分析を通して追求し、最終的には、その文學に顯著な「居易」（易きに居る）の詩想

にまで論及して、新たなる作家像を浮かび上がらせてみたいと思う。

〔二〕

『白氏文集』にみえる家屋表現の意義について論じる場合、どうしても再確認しておかなければならないポイントは、白居易が〝私人〟としても、また〝詩人〟としても、人間の身心の據り所となる居住空間――生活空間――に、並々ならぬ注意を拂い續けたという事實である。その結果として彼は、家屋空間を主題にする韻文作品を、合計一六〇首以上も制作している。このほかのおびただしい部分描寫や散文作品（「草堂記」[1]〔1472〕「冷泉亭記」〔1482〕「池上篇序」〔2928〕）の存在を考慮すると、こうした傾向は、ほとんど決定的と言わざるを得ないであろう。そしてそれらがいずれも、白居易閑適文學の眞髄（essence）となっていることは、とりわけ注意されねばならない。膨大な詩篇が制作され蓄積された唐代三百年にあって、彼ほどに家屋・住居を詠い込んだ詩人を指摘することはできない。その著しい偏りは、『全唐詩』九〇〇卷の詩題を通覽しただけでも、卽座に理解される。結論的に言えば、いわゆる「詠家詩」なる題材詩の系譜は、白居易の登場によって一つの頂點を迎えている。

自身の居住空間を積極的に詩材化――題材化・素材化――する姿勢は、(1)日常の事象に密着した文學性、(2)定住願望・安定志向の人生觀、(3)「白氏の子（おとこ）」として生活全般にわたって負わされた責任、などの諸要素を背景にして、必然的に形成されたものと判斷される。(1)は、白居易詩一般に認められる「日常性の詩化」「詩作の日常化」「日常生活語彙の導入」「生活日誌的作風」などの性格を意味するであろうし、(2)は、貧困と戰亂のため、中國各地を轉々と漂泊しなければならなかった青春時代の暗い體驗が影を落しているであろう。そしてまた(3)は、科擧受驗直前の二十三歳で父（白季庚）を失い、江州左遷後の四十六歳で兄（白幼文）を亡くしたことで、一族（寒門）の〝出世頭〟として、白家全ての人々を庇護していかなければならなかった立場を示していよう。これら三點は、居易と家屋の結びつきを考えるうえで、最も基礎的な前提條件となっている。

ところで、前述(1)(2)(3)以上に肝要な點は、白居易が自己の「身心」の狀況や狀態に對して、極めて敏感なタイプの人間であった、という事實である。そうした心性や氣質は、生來の病弱體質を中心として、幼年期から青年期にかけての人生

經驗や家庭環境によって、徐々に形づくられたものと推測される。その鋭いまでの感受性は、自らの「身・心」を取り巻く空閑の末端にまで張り巡らされている。彼にとって、實生活の中核となる家屋空閑は、單なる建築物のレベルに留まるものではなかったようである。それはいわば、生きてある肉體と精神の延長として、絶えず意識され把握され續ける對象であったように見受けられる。白居易に大量の「詠家詩」を生産させた要因は、いわゆる「兼濟」（對他的視點）から「獨善」（對自的視點）への詩想轉換に據るとも言えようが、より本質的には、この詩人獨得の身心觀・閑適觀が大きく作用していると言わねばならない。『白氏文集』の各卷には、「身」と「心」、「閑」と「適」に係わる重要なタームが、極めて多量かつ多様に使用されている。そこでは、「身・心」兩次元の「閑・適」――あるいはその對極としての「忙・不快」――の有無・强弱が、繰り返し檢討され確認されている。その執拗なまでの拘泥は、例えば以下に示す複數の常用表現に、最も端的に現れている。白居易は、「身」と「心」の「閑」境・「適」境を、複數の觀點から縱横無盡に詠出する。その粘着性の强さは、驚異的ですらある。

〔A〕「身」の「閑」を説くケース（○「身閑」、○「終身閑」、○「身更閑」、○「身安閑」、○「我身日已閑」、……）。
〔B〕「身」の「適」を説くケース（○「身適」、○「形適」、○「體適」、○「足適」、○「適我口」、○「適吾口」、○「體非道引適」、……）。
〔C〕「心」の「閑」を説くケース（○「心閑」〔「閑心」〕、○「神閑」、○「思閑」〔「閑思」〕、○「意閑」〔「閑意」〕、○「閑情」、○「心境閑」、○「心覺閑彌貴」、○「意無江湖閑」、……）。
〔D〕「心」の「適」を説くケース（○「心適」、○「中適」、○「適意」、○「適性」、○「適情」、○「心中適」、○「心適然」、○「心又適」、○「心歡適」、○「心不適」、○「意不適」、○「不適意」、○「人心不過適」、……）。
〔E〕「身・心」の「閑・適」的價値を説くケース（○「心泰身寧」、○「身心安樂」、○「身穩心安」、○「體適心悠」、○「外適內和」、○「體寧心恬」、○「心寬體長舒」、○「心安體亦舒」、○「身意閑有餘」、○「身輕心無繫」、○「神安體穩暖」、○「身閑心無事」、○「體與心同舒」、○「形神閑且逸」、○「身窮心甚泰」、○「身窮心不窮」、○「但能心靜卽身涼」、○「身似浮雲心似灰」、……）。

「身・閑」「身・適」「心・閑」「心・適」を經て「身與心・閑而適」へと收束される五つの視座は、白氏一流の閑適世界を讀み解くために、絶對不可缺の條件となっている。およそあらゆる人間にとって、身心を寛がせる親密な空間が、家屋(家庭)であるとするならば、自らの身體環境に人一倍過敏な白居易が、「閑而適」なる住居の取得と完成を目指して、しばしば轉居を繰り返した理由も、容易に理解されよう。白居易における家屋は、現實の日常生活・社會生活の據點であるばかりでなく、その詩歌を生き生きと立ち上がらせる最も重要な文學空間となっている。彼の「詠家詩」は、根源的な部分で、人間の身體そのものに連續している。以下の各章では、これらの指摘を實證するために、一つ一つの作品を注意深く讀み進めていきたい、と思う。

〔三〕

白居易の家屋表現は、自己と他者のそれにはっきり區分される。本章では、專ら後者の詩篇について、その詠法・作風を整理し、若干の考察を加えてみたい。他者の住居空間としてまず最初に注目されるのは、卷一から卷四までの諷諭詩に登場する〝貴人〟〝高官〟〝將軍〟の邸宅である。確認できた四首のうち三首は、「秦中吟十首」〔0075〜0084〕「新樂府五十首」〔0125〜0174〕にも收錄される自信作であり、かつまた、白居易三十代の住居觀が窺える興味ぶかい作例となっている。彼は、「凶宅」〔0004〕「秦中吟十首、其三、傷宅」〔0077〕「新樂府五十首、其二十四、兩朱閣」〔0148〕「新樂府五十首、其三十九、杏爲梁」〔0163〕のなかで、人間と住まいの關係について、理知的な分析を行っている。權勢・利欲に驕る者には必ず災難・不幸が訪れることを說く「凶宅」(不吉な家)、一般庶民の住宅難と無駄な遊閑地の有効利用を訴える「兩朱閣」(二つの朱塗りのたかどの)、豪華な大邸宅とその主の末路を誇る「傷宅」(家をなげく)「杏爲梁」(あんずの木をはりにして)など、ここに詠われる家屋空間は、左拾遺白居易によって取材され、觀察され、點檢され、判定される、いわば限りなく三人稱的な空間となっている。いずれも重要な作品なので、その全文を引用してみたい。

①「長安多大宅、列在街西東。往往朱門內、房廊相對空。梟鳴松桂枝、狐藏蘭菊叢。蒼苔黃葉地、日暮多旋風。前主爲將相、得罪竄巴庸。後主爲公卿、寢疾歿其中。連延四五主、殃禍繼相鍾。自從十年來、不利主人翁。風雨壞

簷隙、蛇鼠穿牆墉。人疑不敢買、日毀土木功。嗟嗟俗人心、甚矣其愚蒙。但恐災將至、不思禍所從。我今題此詩、欲悟迷者胸。凡爲大官人、年祿多高崇。權重持難久、位高勢易窮。驕者物之盈、老者數之終。四者如寇盜、日夜來相攻。假使居吉土、孰能保其躬。因小以明大、借家可諭邦。周秦宅崤函、其宅非不同。一興八百年、一死望夷宮。寄語家與國、人凶非宅凶。」（「凶宅」〔0004〕）〈元和元年から元和6年、35歳から40歳、長安〉。

②「誰家起甲第、朱門大道邊。豐屋中櫛比、高牆外廻環。累累六七堂、棟宇相連延。一堂費百萬、鬱鬱起青烟。洞房溫且清、寒暑不能忤。高堂虛且迥、坐卧見南山。繞廊紫藤架、夾砌紅藥欄。攀枝摘櫻桃、帶花移牡丹。主人此中坐、十載爲大官。厨有臭敗肉、庫有貫朽錢。誰能將我語、問爾骨肉閒。豈無窮賤者、忍不救飢寒。如何奉一身、直欲保千年。不見馬家宅、今作奉誠園。(2)」（「秦中吟十首、其三、傷宅」〔0077〕）〈元和5年、39歳、長安〉。

③「兩朱閣、南北相對起。借問何人家、貞元雙帝子。(3)帝子吹簫雙得仙、五雲飄颻飛上天。第宅亭臺不將去、化爲佛寺在人閒。粧閣妓樓何寂靜、柳似舞腰池似鏡。花落黃昏悄悄時、不聞歌吹聞鍾磬。寺門勑牓金字書、尼院佛庭寬有餘。青苔明月多閑地、比屋疲人無處居。憶昨平陽宅初置、吞併平人幾家地。仙去雙雙作梵宮、漸恐人閒盡爲寺。」（「新樂府五十首、其二十四、兩朱閣　刺佛寺寖多也」〔0148〕）〈元和4年、38歳、長安〉。

④「杏爲梁、桂爲柱、何人堂室李開府。碧砌紅軒色未乾、去年身歿今移主。高其牆、大其門、誰家第宅盧將軍。素泥朱板光未滅、今歲官收別賜人。開府之堂將軍宅、造未成時頭已白。逆旅重居逆旅中、心是主人身是客。更有愚夫念身後、心雖甚長計非久。窮奢極麗越規模、付子傳孫令保守。莫教門外過客聞、撫掌迴頭笑殺君。君不見、馬家宅尚猶存、宅門題作奉誠園。君不見、魏家宅屬他人、詔贖賜還五代孫。元和四年、詔特以官錢贖魏徵勝業訪中舊宅、以還其後孫、用奬忠儉。(4)儉存奢失今在目、安用高牆圍大屋。」（「新樂府五十首、其三十九、杏爲梁　刺居處奢也」〔0163〕）〈元和4年、38歳、長安〉。

この四首が共通して描くものは、住人を優しく保護し、慰撫する「生」の住居空閒ではなく、主人の生命を摩滅させながら、急速に腐食し解體していく「死」の家屋空閒である。長安屈指の大邸宅である馬燧邸・德宗二公主邸・李錡邸・盧

從史邸・魏徵邸に注がれる詩人の冷徹な視線は、權威・權力の行く末と家屋一般に内包された一つの宿命的性格――變容性・可塑性・消滅性――を、徹底的に解剖し剔抉している。左拾遺・翰林學士時代の白居易は、諷諭詩獨自の説理機能を最大限に活用して、家もまた、主人とともに生き續け、家長とともに死に絶える存在であることを、明確に指摘したのである。管理者・所有者を失って、急速な時閒の浸食を受けていく家屋像は、前述四首の諷諭性を根底から支えている、と考えてよいであろう。特に④にみえる「逆旅重居逆旅中、心是主人身是客。更有愚夫念身後、心雖甚長計非久。」の四句は、この種のいわば説理的抒情感覺の典型に位置づけられる。身體と家屋に共通する性格――時閒的空閒的客寓性――に直接言及するからである。

さらにまた、他者の家屋で、白居易が最も多く詠うのは、自らの人閒關係を取り卷く人々のそれである。そこでは、互いの〝社交〟〝友誼〟を確認し合う場として、さまざまな人物の家が描寫されている。劉敦質（長安宣平里）・周皓（長安光福里）・元稹（長安靖安里と洛陽履信里）・元宗簡（長安昇平里）・元集虛（江州廬山相辭澗）・皇甫鏞（洛陽宣教里）・裴度（洛陽集賢里）・楊虞卿（長安靖恭里）などの邸宅は、そのごく一部に過ぎない。このグループに屬する「詠家詩」は、約五十首にのぼるが、その詠法・内容は、おおよそ(1)知人宅での談笑を述べるもの、(2)左遷された友の留守宅を訪れるもの、(3)友人の新居完成を祝うもの、(4)親友の〝家自慢〟（あるいはその逆の謙遜・卑下）に答えるもの、(5)鄰宅を話題にするもの、(6)名士の邸宅で催された宴會を詠うもの、の六つに分類することが可能である。(1)の「題施山人野居」〔0706〕「題王處士郊居」〔0886〕「題元十八谿居」〔0941〕「春雪過皇甫家」〔2402〕、(2)の「微之宅殘牡丹」〔0734〕、(3)の「和元八侍御昇平新居四絶句」〔0832～0835〕「題崔少尹上林坊新居」〔3492〕、(4)の「答微之誇越州宅」〔2315〕「微之重誇州居、其落句有西州羅刹之譏、因嘲茲石、聊以寄懷」〔2316〕「酬夢得貧居詠懷見贈」〔3425〕、(5)の「招東鄰」〔0301〕「欲與元八卜鄰、先有是贈」〔0812〕「早春聞提壺鳥、因題鄰家」〔0926〕「贈東鄰王十三」〔2553〕「以詩代書、寄戸部楊侍郎、勸買東鄰王家宅」〔3272〕「病中贈南鄰覓酒」〔3279〕、(6)の「宴周皓大夫光福宅」〔0741〕「題周皓大夫新亭子二十二韻」〔0826〕「房家夜宴喜雪、戯贈主人」〔1173〕などは、いずれもそれぞれの系列における代表作となっている。友愛・友情をメインテーマとするこれら諸詩は、多様な白居易「詠家詩」の作風を理解するうえで、どうしても確認しておかな

ければならないものであろう。

ところで、以上述べてきた「諷諭」「友誼」を第一義とする作品に併行して注意されるのは、「懷舊」を主題とする「詠家詩」である。とりわけ看過できないのは、今は亡き知人・友人の家を訪れた時の感慨を述べる作品群である。〝主人を永久に喪失した家屋〟という一點では、前の諷諭詩と共通するが、これらは全て、白居易とその人物との個人的な――しかも濃密な――想い出や體驗を背景にして作られているため、悲哀・憂愁・悔恨を詠出するより純粹な感傷詩となっている。檢索できた十首のうち、四首を紹介してみよう。

⑤「不見劉君來近遠、門前兩度滿枝花。朝來惆悵宣平過、柳巷當頭第一家。」（「過劉三十二故宅」〔0629〕）〈永貞元年、34歳、長安〉。

⑥「青苔故里懷恩地、白髮新生抱病身。涕淚雖多無哭處、永寧門館屬他人。」（「重到城七絶句、其二、高相宅」〔0817〕）〈元和10年、44歳、長安〉。

⑦「雞犬喪家分散後、林園失主寂寥時。落花不語空辭樹、流水無情自入池。風蕩醮船初破漏、雨淋歌閣欲傾欹。前庭後院傷心事、唯是春風秋月知。」（「過元家履信宅」〔2799〕）〈大和6年、61歳、洛陽〉。

⑧「梁王捐館後、枚叟過門時。有淚人還泣、無情雪不知。臺亭留盡在、客賓散何之。唯有蕭條雁、時來下故池。」（「雪後過集賢裴令公舊宅有感」〔3424〕）〈開成4年、68歳、洛陽〉。

⑤⑥と⑦⑧は、創作年次（壯年←→老年）、制作場所（長安←→洛陽）、採用詩型（絶句←→律詩）にそれぞれ違いがあるものの、親しい人への切ない思いを、生前の家屋を媒介にして表明している點で一致している。校書郎時代の親しい同僚であった劉敦質、禮部試の「知貢擧」（主席考査官）で、生涯の恩師[5]と意識された高郢、世に「元白」と併稱された無二の親友元稹、中唐隨一の權臣であり、晩年の白居易と親交の深かった裴度など、彼ら一人一人の人柄や個性は、故人の家々にそのまま投影されている。ここに表現された住居空閑は、もはや家屋そのものではなく、死去した知人の懷かしく慕わしい分身となっている。その强力な感覺・感情は、「門」「牆」「館」「亭」「池」「庭」という家屋空閑を構成する個々の單位（建造物）に留まらず、「宣平」「永寧」「履信」「集賢」という家屋周緣の里名（地名）にまで浸潤し擴張してい

る。これらの固有名詞は、白居易のかけがえのない人たちの象徴として、特別な意味を持つ記號になっていると考えられよう。そしてひとたび記號化――人格化――されたこの家屋像は、⑥の「永寧門館屬他人」に示されるごとく、住まいが既に他者の手に渡ってしまった後も、決して薄らぎ弱まるものではなかったのである。この種の家屋空間は、限りなく一人稱・二人稱的であり、主觀的・主情的であり、故人を知悉する者の記憶のなかに長く滯留する空間になっている、と考えられよう。

「家屋」と「個人」を強力に結びつけて形成されたこの空間は、時には數百年の時間の懸隔にも強固に耐えるものとなり得る。江州司馬時代の白居易が、東晉の詩人陶淵明の故郷・故宅を訪ねた時の詩は、その事實を最も雄辨に物語っている。陶靖節の文學と人格を敬愛・思慕する白居易は、「予夙慕陶淵明爲人、往歲渭川閑居、嘗有倣陶體詩十六首。今遊廬山、經柴桑、過栗里、思其人、訪其宅、不能默默、又題此詩云。」と序文を記した後、一八〇字を費して次のように詠っている。

⑨「垢塵不汚玉、靈鳳不啄羶。嗚呼陶靖節、生彼晉宋閒。心實有所守、口終不能言。永惟孤竹子、拂衣首陽山。夷齊各一身、窮餓未爲難。先生有五男、與之同飢寒。腸中食不充、身上衣不完。連徵意不起、斯可謂眞賢。我生君之後、相去五百年。每讀五柳傳、目想心拳拳。昔常詠遺風、著爲十六篇。今來訪故宅、森若君在前。不慕樽有酒、不慕琴無絃。慕君遺榮利、老死此丘園。柴桑古村落、栗里舊山川。不見籬下菊、但餘墟中烟。子孫雖無聞、族氏猶未遷。每逢姓陶人、使我心依然。」(「訪陶公舊宅」〔0278〕)〈元和11年、45歳、江州〉。

『白氏文集』巻七、閑適三に收載される五言古體詩であり、『史記』巻六一、「列傳」巻頭の伯夷・叔齊說話(6)を踏まえつつ、窮乏生活のなかで「節」に「靖」んじた高潔な人柄が、丁寧にスケッチされる。そして傍線部「今來訪故宅、森若君在前。」では、家屋自體がまさしく陶淵明その人の身體として意識されている(7)。さらにまたここでも「柴桑里」「栗里」という淵明ゆかりの村名が、遠い過去に死去した詩人の皮膚や肉體に連なる〝親しき空間〟として實感されている。白居易が「陶公舊宅」に寄せる一種の人懷かしさは、陶氏の子孫が今もなお、この地に定住し續けている事實によって、一層增幅

されているであろう。「姓陶人 xìng Táo rén」（陶を姓とする人々）が住む村落の描寫は、時閒と空閒の障壁を越えて生き續けるもう一つの家屋像を、照らし出していると言ってよい。それは、「血緣」と「地緣」に根ざすことで、主人その人を失ってもなお存在し續ける住居像である。ここには、先の諷諭詩とは全く異なった家屋の心象が展開されている。

立ち、歩き、坐し、卧し、眠り、話し、飲み、食す、という人閒生活の全領域を包攝する家屋空閒は、いわばそこに住む人閒の生理を、丸ごと內包する空閒と言ってもよい。一つ一つの個性的な家屋・庭園の佇まいが、住む人の性格・氣質・身分・地位・處世觀・人生觀までも反映するのは、まさしくこのためにほかならない。家庭を營む者にとって、いかに住むかという問題は、いかに生きるかという課題に直結している。こうした視點に立てば、家屋（周邊）は、そこに住まう人閒の「生の痕跡」が最も堆積し、充滿し、濃縮した空閒として捉えることも可能であろう。それは單なる遺品・形見の類とは違って、分節化された面的な擴がりをもつが故に、かつての住人の存在を、一層生々しく主張している。白居易が諷諭詩や感傷詩のなかで、故人（死者）の住居空閒を大變克明に詠うのは、この閉じられた內空閒に、今もなおその人物の「命の痕跡」――確かに實在していたという證據――が凝縮し集中している、と強く實感されるからである。亡き人々の朽ち果てた身體は、現存する家屋空閒のうちにリアルに再生されている。白居易は、彼自身の自覺の有無は別として、家屋が持つこうした身體的性格に、異樣なほど敏感な詩人であったようである。その過敏な詩性は、結果として他者の家を詠う詩篇に、諷諭・友誼・懷友・懷舊などの注目すべき特色をもたらしている、と結論づけられよう。家屋表現と身體感覺の强固な結びつきは、白居易自身の家を詠じる作品のなかに、最も如實に現れている。以下の諸章では、個々の白居易邸に絞って、この問題をさらに深く掘り下げてみたい。

〔四〕

白居易は、大曆七（七七二）年鄭州新鄭縣東郭宅に生まれてから、會昌六（八四六）年洛陽履道里宅で病沒するまでの七十五年閒、おびただしい轉居・移住を繰り返している。その全體的特徵を俯瞰するためには、白居易の傳記を漂泊・仕官・外任・吏隱・退休の五つに區分し[8]、それぞれの時期における移動と定住の遍歷を、地名によって整理してみるのが最も有効であろう。王拾遺『白居易生活系年』（寧夏人民出版

社、一九八一年六月)、朱金城『白居易年譜』(上海古籍出版社、一九八二年六月)、羅聯添『白樂天年譜』(國立編譯館、一九八九年七月)、妹尾達彦「白居易と長安・洛陽」〔白居易兩京居住表稿〕(『白居易研究講座、第一巻、白居易の文學と人生I』所收、勉誠社、一九九三年六月)などの研究成果を踏まえてまとめてみると、おおよそ次のようになるだろう。

※〔漂泊期〕(大曆七年〈一歳〉から貞元十七年〈三十歳〉まで)新鄭・滎陽→符離(埇橋)→江南(蘇杭)→越中(浙江)→符離→襄陽→符離(丁父憂)→浮梁→洛陽→宣城(鄉試及第)→洛陽→長安(進士科及第)→洛陽→浮梁→符離……、

※〔仕官期〕(貞元十八年〈三十一歳〉から元和十年〈四十四歳〉まで)符離→長安(書判拔萃科及第・常樂里の故宰相關播宅東亭)→許昌→符離→下邽(卜居)→長安(才識兼茂明於體用科及第・永崇里の華陽觀)→長安(永樂里)[9]→盩厔→長安(新昌里)→長安(宣平里)→下邽(丁母憂)→長安(昭國里)……、

※〔外任期〕(元和十一年〈四十五歳〉から寶曆二年〈五十五歳〉まで)江州(廬山草堂)→忠州→長安(卜居・新昌里)→江州→杭州→洛陽(卜居・履道里の故散騎常侍楊憑舊宅)→蘇州→新鄭・滎陽→洛陽……、

※〔吏隱期〕(大和元年〈五十六歳〉から會昌元年〈七十歳〉まで)洛陽→長安(新昌里・この頃賣却)→洛陽→下邽→洛陽……、

※〔退休期〕(會昌二年〈七十一歳〉から會昌六年〈七十五歳〉まで)洛陽。

前掲妹尾論文では、白居易における長安・洛陽の居住傾向について、(1)三十三年に及ぶ長期の兩京生活、(2)長安での頻繁な轉居と洛陽での同一の居住地、(3)官品の昇進に伴う借家から持家への住み替え、(4)街東中南部という新興住宅地内での轉居志向、という四點を擧げ、それぞれ詳細な考察を行っている。そしてそのいずれもが、中唐期の住居論・都市論として極めて重要な指摘となっている[10]。本稿では、これらの要點を基礎にして、主に詩人論・閑適論の立場から、白居易自身の各種住居空閒の意味を解讀していきたい。結論的に言えば、白居易邸變遷の歷史は、そのまま、閑適の至境を完成させるための道程に置き換えることができる。十代前半から五十代前半まで、數多くの住居(旅館・借家・持家・官舍・草堂・道觀・寺院)を移り住むことで、白居易は、自らの家屋空閒のあるべき理想像を獲得していった、と考えられる。「身・心」の完全なる「閑・適」が達成される洛陽履道里邸

に辿り着くまでには、實に五十三年もの久しい歳月が必要だったのである。

〔五〕

白居易の居住空閒として最初に問題にすべきは、長安在住期の借家を詠う作品である。仕官時代の白居易は、長安での轉居を少くとも六回經驗している。校書郎（正九品上）を振り出しに官僚生活のスタートを切った常樂里（三十二歳）、制科及第を目標にして、元稹ともども受驗勉强に明け暮れた永崇里（三十四歳）、生涯の伴侶楊氏との新婚生活を過ごした新昌里（三十七歳）、病弱な母陳氏の最後を看取った宣平里（四十歳）、江州左遷への出發地となった昭國里（四十四歳）など、白居易前半生の重要な節目となる場所は、全て例外なく賃貸の假寓地である。物價の高い首都長安で、彼が自分の住宅を購入できるようになるのは、俸祿が比較的潤う「五品官」（主客郎中・中書舍人）になってからである。白居易の年齡で言えば、五十歳に相當する。

まず祕書省校書郎時代、常樂里での借家暮らしを述べた五言古體詩一首を引用する。『白氏文集』卷五、閑適一の冒頭を飾る作品であり、白居易における「卜居」人生の原點に位置づけられる。時に三十二歳。

⑩「帝都名利場、雞鳴無安居。獨有懶慢者、日高頭未梳。工拙性不同、進退亦遂殊。幸逢太平代、天子好文儒。小才難大用、典校在祕書。三旬兩入省、因得養頑踈。茅屋四五閒、一馬二僕夫。俸錢萬六千、月給亦有餘。既無衣食牽、亦少人事拘。遂使少年心、日日常晏如。勿言無已知、躁靜各有徒。蘭臺七八人、出處與之俱。旬時阻談笑、旦夕望軒車。誰能讎校閒、解帶卧吾廬。窓前有竹翫、門外有酒沽。何以待君子、數竿對一壺。」（「常樂里閑居、偶題十六韻、兼寄劉十五公輿、王十一起、呂二炅、呂四頴、崔十八玄亮、元九稹、劉三十二敦質、張十五仲元（ママ）、時爲校書郎。」〔0175〕）〈貞元19年、32歳、長安〉。

政治都市長安での最初の生活據點は、「茅屋四五閒、一馬二僕夫。」からなる常樂里故宰相關播宅の東亭であった。この詩からは、借家ながらも、我家を手に入れた青年官僚の喜びが傳わってくる。「遂使少年心、日日常晏如。」は、その僞らざる心情告白であろう。大都會での獨身生活への期待は、隨所に感じられるが、ここでは「解帶・卧吾廬」の姿勢表現に

注意したい。[11] 白居易が自宅を「吾廬」と描寫するケースは、全部で十三例指摘できるが、本詩は傳記上、その最も早い用例となっている。白居易初期の閑適空間は、陶淵明が「斯晨斯夕、言息其廬。」（陶澍注、戚煥塤校『靖節先生集』卷一、「時運并序」）「朝爲灌園、夕偃蓬廬。」（同前、卷一、「答龐參軍并序」）と詠出した家屋表現を踏襲するかたちで出發したのである。この後、白居易の住居空閑は、轉居を繰り返すことで、少しずつ修正され改善されていくことになる。「卧吾廬」表現を用いて、「家屋」と「身心」の關係を見詰めた作品に、「松齋自題」〔0190〕がある。三十七歳、長安新昌里の寓居での作。三十代の閑適詩の傑作に數えられる。

⑪「非老亦非少、年過三紀餘。非賤亦非貴、朝登一命初。才小分易足、心寬體長舒。充腸皆美食、容膝卽安居。況此松齋下、一琴數帙書。書不求甚解、琴聊以自娛。夜直入君門、晚歸卧吾廬。形骸委順動、方寸付空虛。持此將過日、自然多晏如。昏昏復默默、非智亦非愚。」（「松齋自題、時爲翰林學士」〔0190〕）〈元和3年、37歳、長安〉。

〝松齋〟は居易の書齋の名。自らそこに「題識〔誌〕」(tízhì)した五言古體詩である。白居易にとって家屋空閑を詠うことは、自己の身心の在り方、自身の人生の行く末を問うことに直結していたことが、改めて確認されよう。白居易は、「老と少」「賤と貴」「才と分」「心と體」「形骸と方寸」「琴と書」「君門と吾廬」「智と愚」を相對化させることで、閑適の時空を支配する力學を、冷靜に見極めようとしている。白居易の閑適世界は、危ういまでに微妙なバランスの上に、辛うじて成立している。日々束縛される官吏でありながら、自由快適な私人を保つためには、特定の「場」に偏重し埋沒しない絶妙な距離感覺・平衡感覺が必要である。「膝」が「容」るだけの手狹な家屋空閑を、躊躇なく「卽」座に「安居」と言い切るためには、物事を多元的に捉える强靱でしなやかな精神が不可缺である。白氏晩年の「詠家詩」の特色を先取りしているという點で、本詩は極めて注目すべき作品になっている。

以上總合して考えると、長安での借家生活は、結局白居易にとって、必ずしも一〇〇パーセント快適・靜穩なものではなかったようである。そのことは、彼がほぼ二年閑隔で轉居を繰り返している事實によって、明確に證明されよう。定期的な俸祿の支給によって、「凍餒」は免れているものの、面積の狹い新昌里邸（「松齋自題」〔0190〕）、職場から遠い昭國里

邸（「昭國閑居」[12]〔0268〕）など、借家は借家としての限界を、常に意識させたようである。この時期の「詠家詩」では、「窮巷」「貧家」「地僻」「居處僻」「門深」「晝掩關」「何須廣居處」「丈室可容身」「門巷晝寂寂」などの表現が、しばしば用いられている。大邸宅を題材にする一連の諷諭詩が、この長安寓居時代に集中して作られていることは、單なる偶然ではないであろう。白居易の身體と家屋との間には、補塡し難い溝が嚴然と存在した、と言わねばならない。彼の「體」と「心」が、住居全體に隈なく行き渡り、人生の姿勢までも强烈に主張するようになるためには、白氏所有の私的居住空間――白家――の確立が絶對に必要であった、と思われる。それはいつ、どこで、どのように實現されたのであろうか。そのプロセスを追究することは、そのまま詩人白居易の本質に迫ることを意味している。

（未完）

〔註〕

（1）本稿で使用する作品番號は、花房英樹『白氏文集の批判的研究』（朋友書店、一九七四年七月）同『白居易研究』（世界思想社、一九七一年三月）に基づく。また引用する白居易詩文は、基本的に『那波道圓本白氏文集』（陽明文庫本・四部叢刊本）に據り、原註は『南宋紹興刊本白氏文集』（北京文學古籍刊行社本）に從う。

（2）馬燧舊宅の變遷については、朱金城『白居易集箋校（全六冊）』（上海古籍出版社、一九八八年十二月）の第一冊八十六頁に詳しい。

（3）陳寅恪『元白詩箋證稿』（上海古籍出版社、一九七八年三月）「兩朱閣」の條を參照。

（4）「李師道奏請出私財、收贖魏徵舊宅事宜、右、今日守謙宣、令撰與師道詔、所請收贖魏徵宅、還與其子孫、甚合朕心、允依來奏者。臣伏以魏徵是太宗朝宰相、盡忠輔佐、以致太平、在於子孫、合加優卹（ママ）。今緣子孫窮賤、舊宅典賣與人。師道請出私財收贖、却還其後嗣。事關激勸、合出朝廷、師道何人、輒掠此美。依宜便許、臣恐非宜。況魏徵宅內舊堂、本是宮中小殿、太宗特賜、以表殊恩。既又與諸家不同、尤不宜使師道與贖。計其典賣、其價非多。伏望明勑有司、特以官錢收贖、便還後嗣、以勸忠臣。則事出皇恩、美歸聖德。臣苟有所見、不敢不陳。其與師道詔、未敢依宣便撰。伏待聖旨。謹具奏聞。謹奏。」（「論魏徵舊宅狀」〔1957〕）〈元和4年、38歲、長安〉。

（5）「宦途自此心長別、世事從今口不言。豈止形骸同土木、兼將壽夭任乾坤。胸中壯氣猶須遣、身外浮榮何足論。還有一條遺恨事、高家門館未酬恩。」（「香鑪峯下、新卜山居、草堂初成、偶題東壁五首、其五」〔0979〕）〈元和12年、46歲、江州〉。

（6）「伯夷・叔齊、孤竹君之二子也。父欲立叔齊、及父卒、叔齊讓伯夷。伯夷曰『父命也。』遂逃去。叔齊亦不肯立而逃之。國

人立其中子。於是伯夷・叔齊聞西伯昌善養老、盍往歸焉。及至、西伯卒。武王載木主、號爲文王、東伐紂。伯夷・叔齊叩馬而諫曰『父死不葬、爰及干戈、可謂孝乎。以臣弑君、可謂仁乎。』左右欲兵之。太公曰『此義人也。』扶而去之。武王已平殷亂、天下宗周、而伯夷・叔齊耻之、義不食周粟、隱於首陽山、采薇而食之。及餓且死、作歌。其辭曰、『登彼西山兮、采其薇矣。以暴易暴兮、不知其非矣。神農・虞・夏忽焉沒兮、我安適歸矣。于嗟徂兮、命之衰矣。』遂餓死於首陽山。」。

(7) このように意識化される背景には、陶淵明文學における家屋表現の量的質的比重の大きさが、特に指摘されよう。住居空間に言及する「九日閑居幷序」「歸園田居五首」「移居二首」「癸卯歲始春懷古田舍二首」「還舊居」「戊申歲六月中遇火」「歸去來兮辭幷序」「五柳先生傳」などは、彼の詩文の代表作となっている。

(8) この傳記區分については、堤留吉『白樂天研究』(春秋社、一九六九年十二月)を參照。

(9) 「憶昔嬉遊伴、多陪歡宴場。寓居同永樂、幽會共平康。……」(「江南喜逢蕭九徹因話長安舊遊戲贈五十韻」〔3689〕)〔『唐人選唐詩』「才調集」卷一(上海古籍出版社、一九七八年九月)〕に據る。この點については、齋藤茂「白居易の〝話長安舊遊戲贈〟について――風俗資料としての側面から」(『中國詩文論叢』第五集、中國詩文研究會、一九八六年六月)でも取り上げられている。

(10) 本稿と共通したテーマを含む併行的な著作であるので、合わせて參照されたい。

(11) 白居易文學における「坐臥姿勢」と「閑適詩想」との關係については、かつて集中的に分析したことがある。詳細は、小稿「白居易と姿勢描寫――視點の下降が意味するもの」(『中國文學研究』第二十一期、早稻田大學中國文學會、一九九五年十二月)を參照。

(12) 「貧閑日高起、門巷晝寂寂。時暑放朝參、天陰少人客。槐花滿田地、僅絕人行跡。獨在一床眠、清涼風雨夕。勿嫌坊曲遠、近卽多牽役。勿嫌祿俸薄、厚卽多憂責。平生尙恬曠、老大宜安適。何以養吾眞、官閑居處僻。」。